

古典と現代をつなぐ

—自主ゼミ活動と二次創作の試み—

石井 倫子（日本女子大学・教授）

1. はじめに

私どもは、教育学部ではなくて文学部、しかも日本文学科ということで、とにかく本を読むのが好きだったり、古典が好きだったりという学生が集まっていて、毎年20人くらいの学生が教職課程も履修しています。そういった学生も含めてどのように古典を教えるかとはとても大事な問題だと思っています。それについて一つ、こういうことをやっていますという取り組みの例をお話しできればと思います。

ただ、最初に申し上げておかなくてはいけないのは、いわゆる従来のアクティブラーニング的な授業だけをしているわけではなく、むしろ、新しくなった学習指導要領の主体的・対話的で深い学びという、その「深い学び」にウェイトを置いているということです。やっていること自体はオーソドックスな講義でありますので、その点をご理解いただきたいと思います。

まず、学生に向けてどういう古典教育をするかに関して私が大事だと思っていることは、ハンドアウトにもありますけれども、教える側が「この授業を通して何を伝えたいか」の軸をはっきりさせておくことです。シラバスに書く到達目標にプラスアルファで、最終的に学生に到達してほしい着地点を設定して、それに照らし合わせながら授業、その他の活動を組み立てていく。これはある程度計画性を持たなくてはいけないのかなと思っています。

授業の目標としているのは、とにかく「古典の楽しさ、面白さを感じる」こと。そのために、インプットの段階で「あ、面白い」と思わせるための仕掛けを用意することに力を入れています。もちろん、インプットだけで終わらせてしまってはいけないので、それを発信する力、アウトプットですよね、それを身につけさせることも視野に入れています。どの授業でも、そのインプットとアウトプットができるようになればいいと思っています。要するに、社会に出てから古典の魅力や面白さを伝えられる人材を育てることが、授業として目指すところかなと。もちろん100人いて100人がそうなるということはないのですが、100人の1割でも、1.5割でもいいから、そういう学生が育つということが望ましいと思っています。それこそ教員になる学生もいますし、例えば、東京オリンピックのボランティアなどで外国人に接する人も出てくるでしょう。女子大学ですので、結婚して母親になる学生もいる。そういった様々な立場で、次の世代やいろいろな人たちに、古典を自分なりに理解した上でその面白さを伝えられる人間になってほしい。そういうことを、ここ数年は考えております。

2. 学生をアクティブにするには

発信する力を身につけさせる、学生をアクティブにするにはどうしたらいいのかということなのですが、「古典文学“を”学ぶ」ことも大事なのですが、「古典文学“で”学ぶ」ことも大事なのだと思います。以前、「授業で知識プラスアルファの何かがあると学生としてはとてもうれしいし、そこが授業を受けるモチベーションにつながった」と卒業した学生に言われたことがあり、ああなるほどと思って、そのプラスアルファを何にするのかをいろいろ模索しています。

とはいえ、知識なくして自由な発想なしだと思ふのです。ただ単に車座になって、「さあ、話し合しましょう」では何も出てくるはずがない。車座になる前にはある程度詰め込まなきゃ仕方ないだろうというのが私の基本的な立場です。それがあって初めて、遊ぶ余裕が出てくると思うのです。私の授業は決して楽単ではなくて、むしろ多くの学生が避けて通るのですが、その辺はある程度割り切っていて、ついて来られる人だけついて来ればいいと思っています。先ほど申し上げた「インプットに手間暇を惜しまない」というのは、教員もそうだし、学生もそうだということです。

そして、説明のための方便として比喻を使う。もちろん、比喻はあくまでも比喻でイコールではありません。ざっくりした比喻を使い過ぎると本質的なことが分からなくなってしまう懼れがあるのは承知していますが、あくまでも方便として「これは今でいうとこういうことだよ」という説明を適宜織り交ぜて授業を進めると、学生の食いつきが俄然良くなるのも事実です。古典の世界も今とあまり変わらない、人間なんて何百年かそこらでそうそう変わるものではない、ということを理解させることが大事だと思います。

さまざまな情報をインプットしておく、そこから発想が膨らむので、それこそ古今注じゃないですけど、二次創作ができるようになってくる。学んだ内容が自分の中に落とし込めてはじめて二次創作が可能になるわけですから、得た知識を活用してどんどん二次創作的なことをやってみてほしい。これが、私が最近意識してやっていることです。

最後は阿尾先生もおっしゃっていた、学生たちへのリアクションですよ。いいものが出たら、それをどんどん取り上げて、褒める、褒める、褒める。そういうふうに褒めて伸ばすということを積極的にやって、学生が「古典というのは高尚なもので、いじっちゃいけないんだ」と思ってしまうような雰囲気を作ることが大事ではないかと思っています。そのためには、結局私が率先して面白い態度を見せることに尽きるので、学生が作った創作物をどんどん紹介して、それを見てもらう場を設ける。教員がプロデューサーとなって、うちの学生がこういうものを作りましたと、授業内に限らず授業の外でも積極的に紹介していくことを心掛けています。授業内ではさっきの振り返りでもおっしゃっていたように、この人がこういう面白いことをやったよということを、本人の名前を出して褒めていく。その次のステップとして、学生の許諾を得た上で、授業でこれはあなたの方の先輩が作ったものですよと一言添えて配付し、授業教材化していきます。授業外というのは、先ほどもおっしゃっていただいた、SNS、Twitter なんかで、今、こういうことをやっていますと学生たちの活動を周知していくことですね。やはり、自分の作ったものを他の人たちに見てもらえるのはうれしいのですよね、学生は。様々な宣伝活動が、彼女らの二次

創作活動を続けていくモチベーションにつながっているという手応えはあります。モチベーションが上がって新たな創作物が作られ、それが紹介されると、それが「古典は自由に楽しんでいいんだ、私もやってみよう」という呼び水となり、あとに続く学生が現れてくる。少しずつそんな流れができてきた気がします。

3. 知識なくして二次創作なし—文学史における試み—

今の学生ってそういう二次創作がとても好きですよ。聞いてみると腐女子も多いようですし。絵を描いたり、文を書いたりということが基本的に好きで得意な子も多くいますので、そういう面白いことはどんどんやろうという意識が共有できればいいのかなと考えています。もちろん、きちんとした知識に裏打ちされた二次創作でなくてはいけないので、まずはちゃんと知識を身につけてもらう必要があるのですが。

そういうこともあって、文学史での試みとして、隔週でアブストラクトの課題を出しています。これは授業で扱うトピックに関して書かれた学術論文を読ませて 200 字でアブストラクトをまとめさせるものです。こういう形のペーパーでして（スライド「文学史での試み」）、B4 の用紙にまず論文の書誌をとらせて、次にキーワードを抜き出させ、本文中で気になる一文を抜き書きさせ、と一つ一つ手順を踏み、最後に 200 字のアブストラクトを欠かせます。200 字ですからそう長々と書けませんので、この論文は何を明らかにすることを目的としているか、それに対してどういう手順を取って、結論として何が分かったかという 3 本立てで、シンプルにまとめさせています。これを隔週で課して、集めたら翌週赤入れて返す。それをやるということはシラバスにも明記しています。そういう意味では「鬼」なので、先ほど申しましたように、楽に単位が取りたい学生たちには評判がよろしくないわけですね。選択必修の文学史は 100 人以上の受講者があるのが普通ですが、私は当初から 70 人くらいで、しかも 20 人くらいは脱落します。

夏期の課題でも、最近出たところの新しい学術書、たとえば田淵句美子さんの御著書とかそういうものを数冊リストアップして、その中から 1 冊選んで授業の内容と関連付けた 4000 字の書評を書かせています。これもアブストラクトを書いていけば、大体それぞれの章をどのようにまとめればよいかは分かってきますし、それと授業で私が説明したことをうまくリンクさせればそれなりには書けるのです。そういうふうに、書くことに特化させて、文章を正しく読む力と、学術的なものをきちんと読んで把握する力が身につくということを初回の授業で言っています。一年頑張れば中世文学の知識だけでなくそういうスキルもしっかり身につくはずなので、頑張れる人はどんどん履修してほしい。でも負担も大きいので、合わないと思う人は最初からやめておきなさいと宣言してしまいます。あまり履修者が増えてしまうと添削が追いつかなくなってしまうので、わざと月曜の 1 限という学生がいやがる時間に開講しているのですが、サークルの先輩などからすごく力がついたという評判を聞いて、絶対履修しようと思う奇抜な学生も少なからずいます。身も蓋もない言い方ですが、勉強した気にさせるのもサービスのうちですし、このハードな授業を一年間しっかり受け、課題にもちゃんと取り組んだのだということが学生の自信にはなっているようなので、「勉強した充足感」「やりぬいた感」を味わえる授業が一つくらいあってもいいのかなとは思っています。

発信するためには知識、それもできるだけ新しい知識が必要です。文学史も日々アップデートしているので、たとえば小川剛生さんの『兼好法師—徒然草に記されなかった真実』が出た後に、国語の先生が『徒然草』の作者を「吉田”兼好」と教えるようでは困る。授業では最新の研究成果を紹介することを意識しています。情報のシャワーを浴びせることと、アカデミックな論文を自分の力で読んできちんと内容を把握する力を身につけさせることに比重があるので、アクティブラーニングでイメージされるものとは違うかもしれませんね。ですが、こういう作業を通じて文学史上の人間がリアリティをもった存在として感じられるようになってくることに意味があるのです。私が国文科に進んだ時には、もともと中古の『落窪物語』あたりで卒論を書こうかなと思っていたのですが、学部3年の時に久保田淳先生の授業で扱った『六百番歌合』、それがとにかく面白くて。歌合というものにほとんど触れたことがなかった私にとって、歌人たちのプライドを賭けた激しいバトルやそれを捌く判者俊成の融通無碍な判詞は衝撃的で、実に面白かった。それが私が中世に宗旨替えした一番大きな理由なんですね。そういう原体験から、中世の人間の生の姿というものを学生に作品を通じて感じてもらえるような授業を心がけてはいます。

4. 授業から生まれた二次創作

スライド例1から例5までは同じ学生が描いたものです。例1は後白河院のイメージ画で、今様にハマった後白河院はロックンローラーのような格好で描かれています。添えられているコメントを読むと、きちんと、授業で学んだことを踏まえた上で現代風にアレンジしていることがわかります。あまりにセンスが良いので、授業で配っていいか尋ねたら、ぜひ配ってくださいと言うので、後白河院を扱う際に、こういう絵を描いた人がいてねと配付すると、わあっとどよめきが起きました。後白河院が「皇統稀代のロックンローラー」であるなら、それに対する崇徳院はどうかというと、「伝統と憂いの貴公子」ということで、オーソドックスな和歌を愛することや、彼の歴史的なあれこれを考えるとこういう雰囲気だろうという形で描いて、出自についてもこんなふうに、かなり細かく詳しく書いているわけです。天狗になったというところまで含めていろいろなことを取り込んで崇徳院のイメージ画を描いてくれています。

新古今時代の女性歌人も描いてくれました。宮内卿はこんな感じで、例の『増鏡』で紹介されるエピソードを漫画化しています。こちらが後鳥羽院ですね。田淵句美子さんの『異端の皇女と女房歌人—式子内親王たちの新古今集』からの引用もあります。式子内親王はタカラジェンヌの男役なのですね。男装の麗人というのがすごい。今までこんな式子を描いた人はいなかったのではと思うのですが、式子の男歌が強烈に印象に残ったようで、その結果、こういうイラストに仕上がった。ちなみにここにいるのが定家ですね。式子をめぐるさまざまな要素を取り入れながら、彼女なりの式子像を描いてくれています。もう一つ、これは俊成卿女。いかにもバリキャリという感じです。こちらは『越部禅尼消息』によっていますね。これは定家ですけれども、俊成卿女は非常に官能的な歌を得意とするというところで an・an とかでコラボしていそうといった彼女なりのイメージを描いています。こちらも配っていいかと尋ねましたところ、「版權は全部先生に差し上げます」と言われたので、折に触れ使わせてもらっています。

彼女に限らず、授業の内容を自分なりに咀嚼してイメージ画を描く学生は他にもちらほらいます。授業で聞いた話とか、あるいは論文とか、あるいは作品そのものからイメージが立ち上がるということが、私の授業の狙いでもあるので、こういう二次創作は大歓迎です。

授業に対する学生の感想を持って来ました。長いので二つに分けます（スライド「学生の感想」）。文学史の中でも中世は超マイナーで、ほとんど中世の文学についての知識がないまま大学に進学してくるため、初回の授業で「中世について知っている事を書きなさい」といったら『枕草子』について書かれてがっかりするといったことがしょっちゅうあるのですが、「高校までの文学史では名前と何したかを辛うじて知っている程度だった人間を個性の強いキャラクターとして認識することができた」と。キャラクター性を強調することで抜け落ちてしまうことの弊害はこちらもよく分かっているのですが、その人物の性格を知ってキャラを想像することで、作品を以前よりもずっと面白いと感ずることができたというのは大事なところではないかと思います。

女子大ということもあって、学生はやはり女性にとっても興味を持つのですね。建礼門院右京大夫や俊成卿女、健御前などのエピソードとか。彼女らの作品から性格も見えてくるし、それぞれが多少なりとも定家と関わりがあって、定家がいろいろな顔を見せているところが面白かったとか。あとは良経が個人的に気になったといったことも書いています。アブストラクトや書評を通して論文の内容をまとめる手法を学べたということも、課題はよく書いていれば花丸を付けているのですが、花丸をもらえたのは良かったと。大変さもあったけど充実感があったと言ってくれているので、しっかり勉強したいという意識の高い学生にとっては相性のいい授業なのかもしれません。

これまた別の学生ですが、「週刊中世」というのを作ってくれまして（スライド「参考①」）、全部吊り広告風ですが、この中の「祇園精舎の鐘の声、マジ騒音、後白河院でさえ苦い顔」が私は大好きなのです。こういう発想はちょっとなかったなと思って。定家ちゃん人形を特別付録につけてみたり、阿仏尼が出家について解説するコーナーとか、義満が「文化的将軍、北山文化とかの人」で、若い頃の世阿弥とおぼしき目線が入ってる稚児もさりげなく添えられていたりして、実に巧くパロディ化されている。これもオープンキャンパスなどで掲示したりしています。

文学史の学年末試験の最後には、毎回ちょっとしたお遊び問題を出していて、例えばこれです。「もしあなたが新古今時代の歌人を主人公にしたドラマを作るとしたらどのようなものを作りますか」という出題をしたところ、（スライド「参考②」）これは主人公が俊成卿女なのですが、彼女が **GODIVA** ならぬ大企業 **GOTOB**A で出世を目指す。オフィスラブは期待できない……ということで、定家は「仕事はできる系バカ」で、俊成が社長、後鳥羽が大株主で、その秘書が良経。これも彼らの関係性を非常にうまく現代風の設定に置き換えています。適当にストーリーを作ってみましたではなく、自分の中に一度落とし込んだものをきちんと絵にしているところが評価できます。この学生はまだ1年生ですけども、いろいろな先輩たちの例を見ながらこのような二次創作ができるようになってくるというのは私としては非常にうれしいところです。

別の授業、これは専らわたしの専門である能を扱っていて、そちらでも二次創作系の課題を出しています。最初は普通にレポートを課していたのですがけれども、皆同じような先

行研究に乗っかって書くので、内容が似たりよったりになってしまっていて差が付かないのですね。

そこで、『三道』をはじめとする世阿弥の能作論を読んだ時に、思い立って、世阿弥の能作のハウツーを踏まえて自分で夢幻能「世阿弥」を作りなさいという課題を出してみました。これがかなり力作揃いだったのに気をよくして、出身高校の先生から能楽鑑賞会のセッティングと事前講座を頼まれたという設定で、後輩の女子高生たちが能に興味を示すような企画書を作ってごらんないとか。それからこれは今年の課題なのですが、「もし世阿弥が現代に生きていたら」という設定で、世阿弥へのインタビュー記事やお悩み相談など自由に書きなさいと言ったところ、女性誌風グラビアやら格言日めくりカレンダーやら、思いもつかなかったような作品が次から次へと出てきました。

学生がどれだけちゃんと授業を聞いて自分の中で理解しているかは、むしろこういう二次創作的なものを作らせることではっきりするということを、ここ数年で実感しています。そういう課題を考えるのが大変なのですが、でもこのほうが学生たちも喜んでやりますし。彼女ら自身、いわゆる 4000 字とか 5000 字とかのレポートにいささか食傷気味のところもあるので、12 月初めくらいに課題を出して、時間をかけていいから好きにやっごらんと言うと結構本気で取り組むので、力作が続出します。

5. 自主ゼミの取り組み

もう一つ別の例として、今回のタイトルにも挙げた自主ゼミ活動についてお話しします。自主ゼミというのは、私どもの日本文学科で古典・近代・日本語など様々な時代・分野にわたって設けられている学生の主体的な学びの場で、週一回、大体昼休みに活動しています。学部生と院生が集まって一つの作品なりテーマに取り組んでおり、教員もアドバイザーという形で同席してはいますが、できるだけ口を挟まないスタンスでいます。私のところの中世自主ゼミは、メンバーが推し作品を持ち寄り春休み中にプレゼン大会を開催して、どうしてこの作品を扱いたいのかということ各人が説明して、話し合いの末、次年度読む作品やテーマを決めています。週一度で昼休みですから、実質 30 分程度しか時間が取れませんので、授業とはかなり違った形での取り組みになります。

中世の研究テーマ例としては、2013 年度は堀田善衛の『定家明月記私抄』（新潮社、1986）を手掛かりに『明月記』に触れていきました。14 年度の前期は『松浦宮物語』を読み、定家といえば正徹だよねということで、後期はちょうど小川剛生さんの『正徹物語』が出たので、それを手掛かりに、正徹がどれくらい定家をリスペクトしているのかということを中心に『正徹物語』を読みました。15 年度の前期は阿部泰郎さんの『室町時代の少女革命—『新蔵人』絵巻の世界』の出た直後だったので、『新蔵人物語絵巻』を読んだのですが、ご存知のように絵があまりにも素朴なため、もっと絵が綺麗な絵巻を読みたいという声があがり、後期は『彦火々出見尊絵巻』を読みました。16 年度はこれも小川さんのご研究の成果ですが、角川ソフィア文庫の『徒然草』を一年かけて読み、先日のプレゼン大会の結果、17 年度は『無名草子』を読むことに落ち着いたようです。こういった形でその時々の学生の好みによって読む作品を決めています。

今年の『徒然草』ですが、これはさっきの後白河院などの絵を描いた学生ですけれども、

第 54 段をこのようにビジュアル化して（スライド「自主ゼミの風景①」）説明していました。近代文学で卒論を書くだけのことはあって、「完璧なプランニングと演出感のない演出」といった、いわゆる古典の解釈とはずいぶん違う読みを提示してくれて、こちらも刺激を受けます。こちらは兼好の女性観を今でいうところの「オタサーの姫」に対するオタクの眼差しに喩えているところですが、こういう発表ができるのは自主ゼミならではだと思います。

自主ゼミで『明月記』を読んでいたころ「紅旗征戎吾事ニ非ズ」T シャツを作ろうという話が出ました。ちょうど文学史の授業で葦手絵の話をしたところだったのですが、一人の学生がこういうデザインを持って来ました（スライド「副産物 1」）。これ、すごいいいですよ。「紅旗」「征戎」「吾が事に非ず」という具合になっていて、しかも月にテイカカズラが絡みついている、非常に凝ったデザインの T シャツに仕上がりました。これ、普通に着られてむしろお洒落な感じの T シャツなのですが、こういうものを作ってしまうセンスのいい学生がいるのですよね。これをデザインした学生は、この春から神奈川県立高校の国語科の教諭になります。

『新蔵人物語』の紙芝居は、『新蔵人物語』のあまりに素朴な絵を見ているうちに「これぐらいなら自分たちでも描ける」という話になって企画されたものです。本当はもうちょっと綺麗なライト版の絵巻を作りたいという話だったのですが、絵巻を作るのは手間が掛かって大変なので、あきらめて紙芝居にしようということで、こういうふうですね（スライド「副産物 2」）。どの場面をピックアップして絵にするかとか、どういうふうな詞書きを作るかということ自分たちで相談しながら、夏休みにみんなで集まって盛り上がりながら作っていたようです。こういうふうに、それぞれみんながタッチが違うのですよね。紙芝居大会もやりましたが、新入生歓迎の時にこれを置いて見てもらったりしています。

今は、キャットアンドチョコレートというカードゲームの『徒然草』版を作ろうという話が出ています（スライド「副産物 2」）。ご存知でしょうか。キャットチョコというのは私もこのあいだ学生に教わったのですが、アイテムカードと状況カードというのがありますね。状況カードというのは、大変だ、頭から鼎が抜けない！どうしよう！みたいな危機一髪の状況をあらわすもの。それに対してアイテムカードを 3 枚引き、描かれているアイテムを全て使ってこの状況を打破する。大根の精とぼろぼろと芋がしらの三つのアイテムをかくかくしかじかのように利用して鼎を外すという話をほかの参加者が聞き、その話がアリカナシかの判定をするという遊びです。状況・アイテムも全て『徒然草』の中から選んでカードを作ろうという話になり、3 月末日完成を目指して鋭意作成中とのこと。学生たちが面白がっている遊びと『徒然草』を結び付けてやろうという試みで、これも全く私はノータッチです。面白いですよ、「大変だ、兼好の語りが止まらない」なんて状況カードもありますから。どの場面やアイテムを採用するかは全員の話合いで決めたそうです。これもどこかでお披露目する時間を作りたいと言っていました。

自主ゼミメンバーの間で、1 年間の学びの集大成を何か目に見える形にして残したいという思いが共有されているのは嬉しいことですし、それが教員の予想を遙かに上回るスペックであることを頼もしく思います。

6. 能・狂言の普及のために

あともう一つ、これは直接授業とは関係ないのですが、喜多流能楽師の栗谷明生さんにここ5年くらい、能のワークショップをやっていただいています（スライド「栗谷明生師の能楽WS」）。これはもともと、栗谷さんの方から、ご自身の主催する公演の事前講座として、学生と中華料理を食べながら上演する作品について話をする場を作って欲しいというお話があり、そこから恒例のイベントになったものです。例えば能面を持ってきて着けさせてくださったり、さまざまなワークショップをやってくださっているのです。先日も能の鬘帯を付けるということ、モデル役と着けさせる側に分かれて三人がかりで、こうやって能の鬘帯を結ぶのですよとかなり詳しく教えていただきました。

本学の附属中学校で、3年生対象の能楽鑑賞事前講座を十年ほど頼まれておりまして（スライド「能楽WSを実践に活かす」）。このWSでの体験を実践に活かさない手はないということで、WSに参加していた附属中学出身の学生を同道し、後輩の中学生に能面を付けさせるということをやってみました。真面目な学生なので、自宅でぬいぐるみをモデルに高校時代に使っていたハチマキを使って鬘帯を結ぶ復習をした写真を送ってきました。これは〈敦盛〉に用いる十六という面を中学生に着けているところですが、実際に指導を受けていますから、手際よく着けられるのですよね。なかなか大したものだと思いますが、後輩の前でちょっといいところを見せられるというのは学生にとっても嬉しいことではあるようです。

笠間書院からもうそろそろ出る『ともに読む古典 中世文学篇』、これはもともと「次世代とともに読む古典」というタイトルがついていたものですが、それが諸般の事情で「次世代」が取れて、『ともに読む古典』になりました。編者の松尾葦江先生から、現役高校教員、あるいはちょっと背伸びできるような高校生を読者として想定をして、その現役の高校の先生が自分の授業にも応用できるようなアプローチで作品を読んでほしいという指示がまずありました。研究論文ではないし、それからいわゆる指導案でもない。とにかく、自分たちが次世代に伝えたいことを教壇に立って、上から目線じゃなくて話すつもりでという点を意識して書いてほしいとのご要望があったわけです。引き受けたはいいが、さて何を書いたものかと途方に暮れていたのですが、「次世代とともに読む」を実践しようと思ひ立ち、何をやったかという、自主ゼミメンバーの中でそういうことに興味のある学生、私の能の授業を取っている3名ですが、彼女らと数回「作戦会議」をLINEのやり取りをしながら実施しました。うち2名は教職課程履修者なので、自分が高校の教員だったらこういったものが欲しいということを中心にアイデアを出してもらいました。私の担当は狂言でしたので、どの作品を取り上げたいか、あるいはどういったアプローチをすれば高校生が興味を持つかということを考えてもらい、その意見を踏まえて執筆することを試みました。

その時のメモがこういうものなのですけれども（スライド「『ともに…』執筆のため」）、まず、狂言の登場キャラの紹介もかねて、最初に「あなたはどのタイプ」式のフローチャートがあるといいのではという話が出て、神とか、太郎冠者とか、大名とかいろいろいるよねと、私もちょっとは口を出しましたが、基本的には学生たちに任せて「作戦会議」の場でいろんなことを話し合ってもらいました。その結果、これちょっとネタバレになっち

やうのですが、笠間さんにぜひ入れてくださいとお願いして、今までさんざん描いてくれた例の学生、私たちは画伯と呼んでいるのですが、この画伯が描いた診断チャートを入れてもらいました。「よく人から頼られるタイプだ」から YES/NO で辿っていくと、福の神・大名・太郎冠者……といった狂言のキャラクターにたどり着くようになっています。ために法政大学能楽研究所の所員の人たちにやったもらったところ、みんな違うキャラになって「良く出来ている、面白い」となかなか好評でした。要するに、狂言はどこにでもいる人間をテーマにしているのだということの導入としたかったわけです。これを笠間書院から出してもらえることの意味は大きいと思います。

結局、こういうことって学びの集大成ですよ。協力してくれた学生たちも今度4年生になります。今までやってきたことがこのような形で世に出ることになって、いい経験になったのではないかと思いますし、こういう経験は就活にも役立つのではないかとも思います。やっぱり知識を習得するだけではなく、それを社会に活用できる、どんな形でもいから還元できる人間を育てることが大事だと改めて思いました。

7. おわりに

ただ、こういった取り組みの問題点としてはやはり、ものすごく時間がかかることです。今日始めて一週間後にどうこうという話ではないので、長い目で見なきゃいけない。育てるのには時間がかかりますし、手間暇掛けようと思ったら当然授業の進度は遅くなるので、文学史もアブストラクトの課題なんてやっていたら当然進まない。だから私の文学史はいつも新古今時代の歌人たちで終わってしまって『徒然草』にまではとても辿りつきません。そのあたりは私自身もジレンマで、もっと授業を先まで進めたいという思いもあるのですが、きちんと文章を理解しまとめる力が身に付けば良いのだと割り切って、学生にも目をつむってもらっている状態です。

そして、教員の負担も大きいので、大人数の授業では成り立たない。阿尾先生もおっしゃったように、20人くらいだったらなんとかなるけれどもということ。最初に申し上げたように、文学史は大体50人ちょっとくらいですかね、毎回ちゃんと出席してアブストラクトを提出しているのは。それでもこちらは結構いっぱいいっぱいですから、これ以上受講者が増えたら破綻してしまうでしょう。

学生との相性に左右される部分も大きくて、こちらの誘いに面白がって乗っかってくれる学生が多ければいいのですが、そうでないとアウェイ感が強くなってしまいます。ここ2、3年は波長の合う学生が多かったおかげでとても楽だったのですが、いつもそうとは限らないので、学生の様子をうかがいながらその都度微調整をしていく必要があります。ただ、学生たちは、自分で調べて考えることが日本文学科の学生の本分だと考えている節もあるので、そうであるのなら、それをできるだけ活かして発信させるような授業を組み立てていくということも必要ではないかなと個人的には考えています。

以上、非常に雑駁になってしまいましたが、私の取り組みについてご報告させていただきました。ここにプリントアウトして持ってきたのは、文学史の授業1回分のコメントです。これは授業が終わったあとで2日間締め切りを設けて、授業に対して感想なり、コメントなり、質問なりを掲示板に書かせているものです。正直なところかなり負担なのです。

が、アブストラクトの添削がないときはそれにコメントを付けて返しています。授業時間内ではアクティブラーニングとはいえないけれど、授業外でアクティブであるということにはなるでしょうか。とにかくいろいろな情報を詰め込んで始めて、そこから自由に使える知識が出てくる。どうすれば学生をそのステップにまで引っ張り上げることができるか、これからもあれこれ試行錯誤しながら模索していきたいと思います。ありがとうございました。

第4回「初中等学校における古典教育」研究会

古典と現代をつなぐ —自ませミ活動と二次創作の試み—

2017年3月15日 於 日本女子大学百年館高層815会議室
日本女子大学 文学部 日本文学科
石井倫子

学生に向けての古典教育

- ① 教える側が「授業を通じて何を伝えたいのか」を明確にしておく。
 - ② 授業の目的は何か。到達目標をどこに設定するか。
- ここに照らし合わせながら授業その他の活動を組み立てる。

授業の目的

◇古典の楽しさ・面白さを感じる

INPUT

◇それを発信する力を身につける

OUTPUT



社会に出て、さまざまな立場から古典の魅力を伝えられる人材の育成が狙い

学生をアクティブにするには……

- ① 「古典文学」を「学ぶ」と「古典文学」で「学ぶ」
- ② 知識なくして自由な発想なし
⇒ INPUTに手間暇を惜しまない
- ③ 方便としての比喩・二次創作のススメ
- ④ 学生へのリアクションが大切

学生をアクティブにするには（承前）

- 教員が率先して面白がる
- 創作物の紹介・発信の場を設ける
（プロデューサーとして）
授業内・外で紹介
- ➡ 学生のモチベーションが上がる
- 紹介された創作物の及ぼす影響
- ➡ 古典を楽しむ意識
後に続く学生が現れる

つまるところ……

古典文学を楽しむ・古典文学で遊ぶには
知識が必要

情報のシャワーを浴びせる
アカデミックな論文を自分の力で読み、
内容を理解する



古典文学史上の人物が
リアリティをもった存在として感じられる

文学史での試み一

◆隔週のアブストラクト課題

授業で扱うトピックに関して書かれた論文を読みませ、
200字でアブストラクトを書かせる。

◆夏期課題は4,000字の書評

数冊の課題図書から一冊を選び、
授業内容と関連づけて書評を書かせる。

例1) 後白河院イメージ画

例2) 崇徳院イメージ画



例3) 宮内卿イメージ画



例4) 式子内親王イメージ画



例5) 俊成卿女イメージ画



学生の感想 1/2

この文学史では名前と何をしたらかには知っている程度だった人物を、個性の強いキャラクターとして認識し、楽しく理解を深めることができました。そして、その人物の性格を知りキャラクターを想像することで、作品を読んでも前よりずっと面白いと感じました。

定家のことを「アニメ向きないいキャラしてる」と思う日が来ることは考えられません。俊成卿女や健御前、右京大夫などキャラの全く違う女性たちのエピソードも本当に面白く、それぞれ多かれ少なかれ定家と関わりがあり、相手によって定家が色々な顔を見せるのも楽しかったです。他には天才肌優等生タイプの良経が、個人的には気に入りました。

11

学生の感想 2/2

また、アプストラクトや書評を通して論文の内容を簡潔にまとめる手法を学べたことも、今後に繋がるスキルです。回数を重ねてだんだん慣れてきたことが実感できたのも嬉しいことです。書評でいい評価が頂けたのも自信になりました。

この講義はもちろん大変さもありませんでしたが、それ以上の充実感がありました。一年間、有意義な学習を本当にありがとうございました。試験も頑張ります。

12

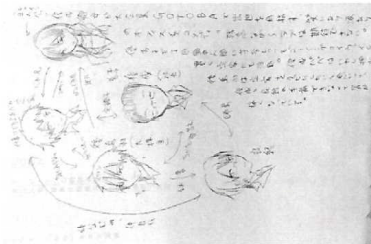
参考① 『週刊中世』



13

参考② 文学史学年末試験

「もし、中世の歌人を主人公にして
一時間ドラマを制作することになったら」



14

その他の課題例

世阿弥の能作論をふまえて、
夢幻能「世阿弥」を作りなさい。

高校の先生から、
能楽鑑賞会のセッションと事前講座を頼まれました。
女子高校生たちが興味を示すような企画書を作りなさい。

授業で扱った世阿弥伝書における世阿弥の言説を踏まえ、
世阿弥が現代に生きているという設定で、
世阿弥へのインタビュー記事や悩み相談など
自由書きなさい。

自主ゼミの活動

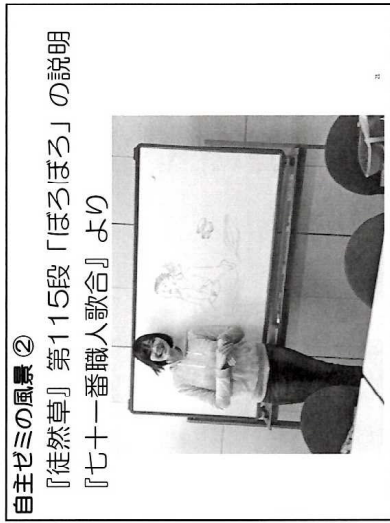
- 学生の主体的な学びの場。
- 週一回、昼休みに活動。学部生と院生が一つの作品・テーマに取り組む。
- Twitterで発信
https://twitter.com/tyusei_ji
- メンバーが「押し」作品を持ち寄り
春休み中にブレゼン大会を開催して
次年度読む作品を決定。

自主ゼミの研究テーマ例

- 2013年度
堀田善衛『定家明月記私抄』
- 2014年度
『松浦宮物語』 / 『正徹物語』
- 2015年度
『新蔵人物語絵巻』 / 『彦火天目見尊絵巻』
- 2016年度
『徒然草』
- 2017年度
『無名草子』 (予定)

自主ゼミの風景①





栗谷明生師の能楽WS (2011～)



栗谷能の会事前講座

としてのワークショップ
(能面・鬘帯体験など)



能楽WSを実践に活かす

日本女子大学附属中学校能楽鑑賞事前講座
能楽WS体験者の出身学生を同道し、
後輩の中学生に能面を着けさせる。



『ともに読む古典 中世篇』 (笠間書院・近刊)

現役高校教員・ちよっと背伸びのできる高校生を
読者として想定。教員が自分の授業にも応用で
きるアプローチで作品を読む。

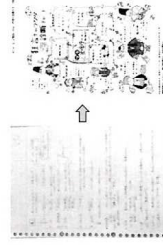
- ① 長々しい研究論文ではなく、
- ② さりとていわゆる「指導案」でもなく、
- ③ 通読できる文章で、
- ④ 次世代へ伝えたいことを教壇で話すつもりで
これらを意識して書いて欲しいというのが
編者(松尾章江氏)からの要望。

『ともに読む古典 中世篇』執筆のため

学生たちと数回「作戦会議」を実施。

自分が高校の教員だったら

- ・どの狂言を取り上げたいか
 - ・高校生の興味を惹くにはどういう
アプローチが有効か
- などを話し合い、その
意見を踏まえて執筆。



大学の学びの集大成

これらの活動を通じて

自分か学んできた知識が
さまざまな場（授業・OCなど）や
社会に活かせることへの喜び



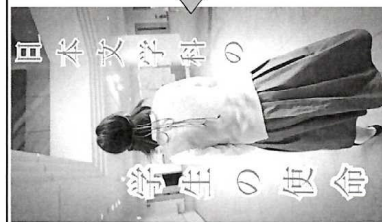
「知識の習得」を通して
「知識を活用できる人材」を育てる！

問題点

Activate には時間が掛かる

⇒ 授業の進度は遅くなる
どこで折り合いを付けるか

⇒ 教員の負担が大き
大人数の授業には不向き



「はつらつものやせり、
学生への働きかけは大切」

ご清聴
ありがとうございました

